滋賀文教短期大学　アセスメント・プラン

2021 年度

本学では、アセスメント・プラン（学修成果の査定や成績評価における目的、達成すべき質的水準評価の実施方法等の計画）について下記の通り定めている。

学修成果の査定により得られたデータは、「学校法人松翠学園 個人情報保護規程」を遵守し適正に扱う。

Ⅰ．3 つのレベルでの学修成果の査定

教育研究活動の質向上及び改善のため、3 つのポリシーに基づいて、機関レベル（大学全体）、教育課程レベル（各学科）、科目レベル（各授業）における学修成果を多面的に査定する。3 つのポリシーは、学位授与の方針（ディプロマポリシー:DP）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー:CP）、入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー:AP）を指す。

各レベルの査定は､2 年間の教育課程での学修成果の獲得状況に基づく｡教学 IR 担当者の提供するデータをもとに、データを踏まえて評価組織が議論を行い査定する。

Ⅰ－１．機関レベル

（１）概要

その年度に得られた主に下記のデータから、年度末までに全学的な学修成果を査定する。

①教育課程レベル及び科目レベルの学修成果の達成状況

②本学自己点検・評価報告書

③学生からのヒアリング結果（学生懇談会、学生満足度調査等）

（２）評価組織

滋賀文教短期大学 運営協議会（学長、副学長、学科長等により編成される全学的方針等を検討する委員会）

（３）査定結果の活用

教育研究活動及び教育課程の編成等における全学的な方針の策定に活用する。

（４）達成が望まれる水準

それぞれの調査について設けている水準による。それらを横断的に参照し、総合的に達成度を評価する。

Ⅰ－２．教育課程レベル

（１）概要

前年度の卒業学年について、卒業後半年経過時点で就業状況調査を実施する。それをもって査定材料となるデータが全て収集できるので、2年間の教育課程での学修成果の獲得状況を年度末までに査定する。

「学修成果」とは、授業や課外活動等の様々な学修の結果として学生が身につける成果である。各学科で身につけられる学修成果の詳細は、学生便覧に掲載している。

多角的に査定できるよう、1つの学修成果に対して3つの査定材料を設けている。

＜国文学科＞

学修成果1：①専門科目 GPA，②漢字検定2級及び準2級以上取得率，③教養科目 GPA

学修成果2：①基礎力プログラムⅣ GPA，②就業状況調査 「他人の話を傾聴した上で自分の意見を伝える力」，
③PROG コンピテンシー総合

学修成果3：①基礎力プログラムⅢ GPA，②就業状況調査 「社内や部署内全体の状況を把握した上で働く力」，③PROG リテラシー総合

学修成果4：①専門ゼミⅠⅡ GPA，②就業状況調査 「課題を発見し、自分なりに考えた上で、新しいことをする力」，③PROG 対課題基礎力

学修成果5：①基礎力プログラムⅠⅡⅢⅣ GPA，②就業状況調査 「職場で適切な議論をする力」，③PROG 対人基礎力

学修成果6：①PROG 対自己基礎力，②就業状況調査 「就職後も自ら学び続ける力」，③学修行動調査（自己評価）自ら学び続ける力

＜子ども学科＞

学修成果1：①専門科目 GPA，②実習評価　保育実習Ⅱ「知識・技術・援助（総合）」／教育実習(小)「基礎学力」，③就業状況調査 「ピアノ演奏や弾き歌いの音楽の技能」

学修成果2：①実習評価　保育実習Ⅱ「職業倫理の理解」／教育実習(小)「児童・生徒の理解」，②就業状況調査「教育者・保育者としての使命感・倫理観」，③学修行動調査（自己評価） 使命感や倫理観を持てたか

学修成果3：①基礎力プログラムⅢ GPA，②就業状況調査 「子どもの安全や健康について、全体の様子を把握して配慮する力」，③PROG リテラシー総合

学修成果4：①基礎力プログラムⅣ GPA，②就業状況調査 「課題を発見し、自分なりに考えた上で、新しいことをする力」，③PROG 対課題基礎力

学修成果5：①基礎力プログラムⅠⅡⅢⅣ GPA，②就業状況調査 「職場で適切な議論をする力」，③PROG 対人基礎力

学修成果6：①PROG 対自己基礎力，②就業状況調査 「就職後も自ら学び続ける力」，③学修行動調査（自己評価）自ら学び続ける力

（２）評価組織

滋賀文教短期大学 FD委員会

（３）査定結果の活用

主に次のことに活用する。

①教育課程の編成

②カリキュラムマップの検討

③担任面談等の学修支援

④学生支援や課外事業等の計画

⑤授業科目「基礎力プログラム」のシラバス検討

⑥FD（授業内容や授業方法等の研修）及び SD（大学運営等の研修）の計画立案

（４）達成が望まれる水準

GPAは2.00～3.00、PROG結果は平均2.5以上かつレベル2以下の割合が50％未満、実習評価・就業状況調査・自己評価は5段階中平均3以上とする。なお、対象者の数が5名以下の場合は必ずしも平均値や割合を基準とせず総合的に判断する。

Ⅰ－３．科目レベル

（１）実施方法

毎学期の授業で得られた下記のデータから、毎学期の各授業での学修成果の獲得状況を査定する。

①授業の成績

②授業アンケート

（２）評価者

当該科目　担当教員

（３）査定結果の活用

主に次のことに活用する。

①授業検討票（担当教員が授業アンケートの結果を基に、授業の検証と具体的な改善策を学生に示す報告書）

②当該科目のシラバス作成

（４）達成が望まれる水準

各授業の到達目標を達成したと実感している学生が60％以上、なおかつ科目GPAが2.00～3.00の間にあるときを望ましい水準とする。各授業の到達目標は、シラバスに記載している。次に図示する表に基づき評価する。

（５）成績評価について

学則第26条及び履修規程第15条に基づき成績を評価し、単位を認定する。詳細については、学生便覧「単位の認定・成績の評価」に記載している。

科目レベル 学修成果の査定

成績基準 ＼ 達成度	※達成度は、授業アンケート到達目標の達成度「達成できた」「おおむね達成できた」の回答の割合で査定 。 80%以上～100%	60%以上～80%未満	45%以上～60%未満	20%以上～45%未満	0%～20%未満
科目GPA 2.00以上～3.00以下	履修学生は、到達目標に到達したと実感している。科目GPAも標準内にある。到達目標と成績評価方法・基準は、関連性があり、適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、更に到達目標の内容を引き上げ、レベルアップにつなげることも可能である。 ←――望ましい水準――→	おおむねの履修学生は、到達目標に到達したと実感し、科目GPAも標準内にある。よって、到達目標と成績評価方法・基準は、適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、到達目標の内容をさらに学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。	約半数の履修学生が、到達目標を達成したと実感し、科目GPAも標準内にある。よって、到達目標と成績評価方法・基準は関連性があり、おおむね適切に設定されている。 ◎次年度にむけては、半数近くの履修学生が到達目標に到達したと実感していないため、学生の達成度を上げる必要がある。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度が測定可能な内容にする。	約半数の履修学生が到達目標を達成していないと感じている。科目GPAについては、標準内にあるが、学生の達成度が低い傾向にあるため改善が必要である。 ◎次年度にむけては、学生の達成度を上げる必要がある。 ・到達目標と成績評価方法・基準を関連性のある内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度が測定できる内容にする。 ・到達目標は、難しすぎる設定になっていないか（学生に合致した内容にする）。	履修学生は、到達目標を達成していないと感じている。科目GPAについては、標準内にあるが、学生の達成度が低いため改善が必要である。 ◎次年度にむけては、下記の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準を関連性のある内容にする。 ・授業内容は、到達目標を意識して構成する。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすい具体的な内容に設定する。 ・到達目標は、達成度を測定できる内容にする。 ・到達目標は、難しすぎる設定になっていないか（学生に合致した内容にする）。
上記以外の 科目GPA数値	履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標や成績評価方法・基準は、簡単すぎる内容または難しすぎる内容になっていないか（学生に合致する内容にする）。	おおむねの履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標や成績評価方法・基準は、簡単すぎる内容または難しすぎる内容になっていないか（学生に合致する内容にする）。	約半数の履修学生は、到達目標に到達したと実感しているが、GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・GPAが低い傾向にある場合は、到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか（学生に合致する内容にする）。	約半数の履修学生が、到達目標に到達していないと感じている。また科目GPAに偏りがある。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 【共通：GPAが高い・低いどちらの科目にも共通】 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすく具体的な内容に設定する。 【科目GPA数値が標準より高い場合：GPAが高い】 ・GPAは高いが達成度は低いため、授業内容・指導方法は到達目標を意識して構成する。 【科目GPA数値が標準より低い場合：GPAが低い】 ・到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか（学生に合致した内容にする）。	履修学生は、到達目標に到達していないと感じている。また科目GPAが標準外である。 ◎次年度にむけては、以下の改善が考えられる。 【共通：GPAが高い・低いどちらの科目にも共通】 ・到達目標と成績評価方法・基準は、関連した内容に設定する。 ・到達目標は、測定可能な内容にする。 ・到達目標の内容を学生が理解しやすく具体的な内容に設定する。 【科目GPA数値が標準より高い場合：GPAが高い】 ・GPAは高いが達成度はかなり低い。授業内容・指導方法は到達目標を意識して構成する。 【科目GPA数値が標準より低い場合：GPAが低い】 ・到達目標や成績評価方法・基準が難しい設定となっていないか（学生に合致した内容にする）。

Ⅱ．3つのポリシーに関連するその他の教育分析

本学では、3つのポリシーに基づいた教育活動や学修成果の分析を強化するため、下記の教学IRを行っている。

査定材料や査定方法は、関係各署で検討の上、教授会または運営協議会で決定する。

教学IR担当者の提供するデータをもとに、それぞれの検証や点検に関する担当の委員会が中心となり改善を図る。

Ⅱ－１．入試の妥当性の検証（入学生対象）

（１）関連するポリシー

入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー:AP）

（２）実施方法

入学当初までに得られた入学生のデータと、アドミッションポリシーとの合致性を検証することで、入試の妥当性を入試区分別に検証する。新入生が入学後データを収集でき次第すぐに検証を行うことで、年度内の入試や教育の改善と支援を行う。

APは学科ごとに異なり、詳細は学生便覧に掲載している。

＜国文学科＞

AP1：高校在学時の評定平均

AP2：PROG コンピテンシー総合

AP3：授業外学修時間

AP4：ボランティア・インターンシップ経験

AP5：PROG コンピテンシー 対課題基礎力

AP6：就職希望状況

＜子ども学科＞

AP1：就職希望状況

AP2：PROG コンピテンシー 対人基礎力

AP3：授業外学修時間

AP4：PROG コンピテンシー総合

AP5：ボランティア・インターンシップ経験

AP6：高校在学時の評定平均

（３）担当の委員会

入学者選抜委員会、高大接続委員会

（４）検証結果の活用

主に次のことに活用する。

①入試制度の見直し

②入学前教育の計画立案

③授業や学生支援をはじめとする教育の質向上

Ⅱ－２．入試の妥当性の検証（卒業生対象）

（１）関連するポリシー

学位授与の方針（ディプロマポリシー:DP）

（２）実施方法

卒業生のデータと、ディプロマポリシーとの合致性を検証することで、入試の妥当性を入試区分別に検証する。

在学期間中の学修データや就職先の評価などから、卒業生が受験した年度の入試が妥当に行われていたかを検証する。検証には、次のデータを使用する。

①出願者数、合格者数、不合格者数、入学辞退数、入学者数

②入試得点率（取得点数÷満点）

③高校在学時の情報（評定平均、欠席日数等）

④標準年限学位授与率

⑤学籍異動状況（休学・退学・除籍の割合）

⑥在学時の成績（累計GPA）

⑦資格取得状況

⑧就職状況（就職・進学等の別、就職業界）

⑨就業状況調査（卒業半年時点での就職先からの評価）

（３）担当の委員会

入学者選抜委員会、高大接続委員会

（４）検証結果の活用

主に次のことに活用する。

①入試の見直し

②入学前教育の計画立案

③教育内容と活動の改善

Ⅱ－３．履修体系の点検

（１）関連するポリシー

教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー:CP）

（２）実施方法

カリキュラムマップは、CPとDPの関連性を図示した表である。教育課程レベルの学修成果の査定では、DPとの合致性を検証している。そこで、カリキュラムマップと学修成果の査定結果を横断的に参照することで、次年度の教育課程の編成が適当であるかを点検する。

点検には主に下記のデータを使用する。

①教育課程レベルの学修成果の査定結果（査定に用いた就業状況調査等を含む）

②カリキュラムマップ

（３）担当の委員会

教授会、運営協議会

（４）点検結果の活用

主に次のことに活用する。

①カリキュラムマップの見直し

②科目の時数の見直し

Ⅱ－４．次年度の教育課程編成のためのIR情報の活用

（１）関連するポリシー

学位授与の方針（ディプロマポリシー:DP）

教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー:CP）

入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー:AP）

（２）実施方法

AP、CP、DPそれぞれを適切にふまえた取組が、各学科ならびに大学全体において実施されているかを評価する。

その結果をもとに、次年度の教育課程編成を年度末までに2回以上検討する。使用するデータは下記の通りである。

①教育課程レベルの学修成果の査定

②カリキュラム変更案

③授業外学修時間

④PROGと学修行動調査のクロス集計分析

⑤学年暦

⑥そのほかカリキュラム変更案と関連するデータ

（３）担当の委員会

運営協議会

（４）評価結果の活用

主に次のことに活用する。

①教育課程の編成

②カリキュラム編成

③正課外活動の推奨方法

Ⅱ－５．3つのポリシーを踏まえた本学の取組に関する適切性の点検

（１）関連するポリシー

学位授与の方針（ディプロマポリシー:DP）

教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー:CP）

入学者受け入れの方針（アドミッションポリシー:AP）

（２）実施方法

年度末までに査定や検証を行った3つのポリシーに関連する以下のIR情報を横断的に参照する。

それにより、本学の取組が3つのポリシーを適切に踏まえて実施されているかを点検する。

①入試の妥当性の検証（入学生対象）　…　APに関連

②入試の妥当性の検証（卒業生対象）　…　DPに関連

③教育課程レベルの学修成果の査定　…　DPに関連

④履修体系の点検　…　CPに関連

⑤地域社会や産業界等、本法人の外部の意見

（３）担当の委員会

運営協議会

（４）点検結果の活用

主に次のことに活用する。

①3つのポリシーを踏まえた教育活動の強化

②認証評価以外での自己点検評価

以上